

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

松浦（新姓：武見） 綾子

【所属】（助成決定時）

東京大学法学政治学研究科総合法政専攻博士課程

【研究題目】

安全保障の統合と転換—行政学及び国際行政学の観点から

【研究の目的】（400字程度）

元来、国際政治において安全保障分野は他の分野との関係において原則として独立した分野あるいは機能として分析されてきた。国家防衛はその意図や方法、あるいは時に重要性・緊急性の面において他分野とは一線を画し、分析においてもその特殊性が意識されてきた。科学技術の軍民両用性は世界大戦時代以前から長く認識されていても、多くの場合それは技術そのものの転用可能性やある種の普遍性を示唆するもので、政治・行政分野としての安全保障分野の特殊性を凌駕するものにはならなかった。

本研究は、生化学物兵器・宇宙空間を例にこの間隙を埋め、行政実務レベルのリスクとセキュリティーの統合を論じるとともにレジーム・コンプレックスの理論を用いてグローバルレベルのリスクとセキュリティーの統合における研究を行うことを目的とする。レジーム・コンプレックスはこれまで同じ問題関心における多様なレジームの重複そのものへのアセスメントを目的としてきており、レジームそれぞれの性質や、レジーム発生時期の状況、レジームの安定性などの要素については十分に考察が行われていなかった。2事例においては異なるパターンでのレジーム・コンプレックスが発生しており、この分析によってレジーム・コンプレックス理論の精緻化を行うことで現代の安全保障論に貢献する。

【研究の内容・方法】（800字程度）

本研究は大きく3章に分けられる。いずれもリスクとセキュリティーの統合を扱うが、第1章はグローバルレベルの協調行動、第2章はインターナショナルレベル、特に2国間・地域内での協調行動、第3章は国内の行政統合を取り扱う。

まず第1章では、グローバルレベルでの事例の検討を行う。主に国際機関の一次資料を利用し、すでに国際機関へのインターンによる参与観察などで得ているインタビュー資料なども参考としつつ、米国で行った調査結果をまとめる。レジームが十分に制度化され、それぞれのレジームの所掌範囲が確定するより前、レジームをある程度自由に形成できる段階においてリスクとセキュリティーの交錯が起こっていると認識されている場合には、安心分野（通常行政分野）と安全保障分野において一貫してイニシアチブをとることを目的としてフォーラムショッピングが起こりやすく、通常行政分野の分離による合意形成や、レジーム同志の相互利用を企図した補強などのレジーム・コンプレックスの生産的な利用を行っていくのではないかと。この作業仮説を立て、事例ごとに検討を行った。結果、宇宙および生物化学兵器・国際保健の分野でこの仮説が正しいことが確認できた。

第2章では、国家間、地域レベルでの協力体制の構築について、新しい時代の抑止論という観点からまとめた。従来安全保障における抑止論は核抑止の議論を前提としてきた。しかし、現代的な抑止を可能とするためには、他分野の従来の非安全保障領域における活動の監視、とりわけ民間からの情報収集が欠かせない。かつて防衛セクターが動機づけをする国際協力体制の構築は原則として伝統的な安全保障分野に限られてきたが、防衛セクターは抑止の観点から監視網を拡大するため、同盟諸国や友好的な関係諸国との間での公式対話や協力関係の構築に注力している。その結果、各国の「監視網」という形で異なる分野の交錯関係を

含めた大きなクラスターが構築されていることが観察された。

第3章では、比較政治的な観点から、リスクとセキュリティとの統合に対し各国の国内実務がどのように対処しているか、そしてその相違が国際的な安全保障へのコミットメントに対してどのような影響を持っているかについて比較検討するため、危機管理と安全保障の包括的な統合の見られる英国と、統合的なアプローチを可能としつつも謙抑的な運用を行う日本とを比較し、国際的なレジームにおけるイニシアチブ体制の有無との関係を明らかにした。

【結論・考察】（400字程度）

本研究で最も重要な結論を導くことになったのは1章の部分である。つまり、レジームを形成する段階でどのような背景状況にあるか、ということが想定されていた以上に長期にわたって影響を及ぼしているということである。安全保障と非安全保障（しばしば安心・安全分野）の関係がどのようなものであるか、どのように各国において理解されているかということが、国際的なレジームを形成するにあたり各国が戦略を形成する上で鍵となり、その結果国際的なレジームの利用のされ方にも差異が生じることになった。

また第2章においては、全体のテーマである安全保障の変容が国際政治一般に及ぼす影響について考察することができた。安全保障という議題において最も一般的に語られる地政学的な観点や伝統的な観点からの分析が重要であることを前提としても、異分野との交錯も含めて安全保障は展開しており、特にサーベイランス行動が重要となっている。このことは各国の安全保障戦略を変容させ、情報共有を中心とする同盟国間の関係強化と非同盟国との緊張関係の強化につながった。